

様に立騒ぐ黍畠。叢林の荒立ち。困憊の夜の底に、カヌーの様に身を沈め、こうこうと、又こうこうと彼らは闇に吞まれて行く。

一章

正島考之介

貧しい神のすがたを曳きすり
古びた歴史を脇腹にかかへ
夜の世界のくぼみを寢床に
そこで、お前は何を嗅ぐことが出来たか
雲よ指さすな
崩れた希望の前やうしろに
星の洞む懸崖のあたりに

あの神の言葉は彫り込まれてあるのだ
火を点けてはいけない
歩け、道なのだ。

実験室の詩

波良京二郎

A 試験管の中の生活

試験管の中の生活
正確に規定された分量

(だが俺の生活はそれ程透明ではない)
(だが俺の生活はそれ程冷靜ではない)
(だが俺の生活はそれ程従順ではない)

(そして俺の周囲には常に關聯がある)

だが試験管の中は
常に必ず
變化がもたらされる事を――

B 実験室の季節

エーテルの様に揮發しさつた感情
その後の冷やかさを君は理智と呼ぶ
フラスコにされた心臓のみが堪へ得る
4°Cの蒸溜水だ

しめつばい此の室の空氣
その湿度に比例して
脳髓の水銀柱は心臓のプレッシャーに押し上

げられて
無味乾燥の上層部へと
奔騰して行く。

だが秋の光線はガラス窓を通して
フラスコの面に八ツ手の葉を反影させずには
おかないのだ。
たとへゆがんだ影像であるにしても――。

雅歌

關 且美

明るく耀くかと思ふとまた時雨である。枯葉
でいつばいの地面。そこに誰れかが立つてゐ

る。陰暗なるその空。私はとほい山を見る。

——私は熱を病む、私は癒りさうにもない。
葡萄いろの咳は口にせつなく、私は手を握る
私は消えてしまつた一つの影を浮べ、不規則
な寝汗をかいてはその影を追ふ。

裏庭の植込は荒れてゐる。花々の長い頸がを
れまがつて枯れてゐる。そこに何の祕密もな
い。そこには秋が終つてゐる。私の知らない
顔がある。

足 跡

安藤美濃瑠

北風のトレモロの中にほら聞えるだらう
夜業終へて家路をたどる人々の疲れた足音が
闇の中を疾走して來たつた電車が
足音を消して疾走し去つた——

後には——

凍つた白い道の上に見えない足跡が
無数にあるその足跡の中に私は私の足跡を見
つけて撫然とする——

朝——人々は霜の下に見えない自分の足跡を
踏んで——
大きな疲労と小さなパンを求めに行く。

壁

三崎 巧子

毎夜、私は壁を背に眠る。
夜風がかたまりになつて
かけまはり

私の背にはざらざらのうたがきこえる。

ちつとした寝息は、
氣のないお顔のマリヤ様に抱かれた
キリストの寝息か。

暗がりに起きだして

一人、胡桃を食べてゐると
ひえびえと背に這ふ壁、
——土で出來てる

でも、何故青い草は生えないのか。

寒 鴉 記

松 峰 透

寒竹の苑に鴉を飼ふ。きよらかに僕の冬を祭
るために。
僕は黒眼鏡をかける。復讐を誓つた者のやう
に。

噴水のやさしいしぶきが杖の象牙にひびく

凋落した百日草花の坂道を降りる日は、カメ
ラの蛇腹のやうに伏籠の中を歩いてゐる 哀
憐の鳥を思ふ。

風が吹く、收穫なき北方の詠を合唱しながら
雲雲が来る、黒絹のやうな霧を隕しながら。

海の歌

佐々島敏夫

あそこに神神が歌ふのだと、朝毎に私は思つた——あの若若しい波の指紋を、ナルシサスのやうに見惚れながら、誰も彼も、あの潮騒の縁から生れて来たのだと——

父でもない、母でもない、まだ見た事もない
優しい家族が、そのあたりから白い拳を散ら
ばる雲母のやうにひらめかし、私を迎へて呉
れるのだと——

けれど、生活に濡れ痴れた私の若い骨にまで
照り返る雲の切れ切れを、杏く呼んで、十八
の私よ！

VO、VO、と私が見えない前や後を、横切
るさまざま美しい汽笛も、海鳥の群も流木
も、みんなあのあたりに沈んで了つたのか——
私の夢よ！ その見覚えのある波ですら、
文字のない便りよりも悲しく、今は一枚一枚
めくる事さへ出来ない——

山の歌劇

スミ・マチダ

夕日にうなだれてしやりしやりと
オブラトのやうに啼いてゐる高い枯草。
石斑魚を釣る竿は折れ易く
鮎を狙ふ寒竹の弓は撥ひすぎる。

cottage の北。黄いろい蝶の翅を包んだ氷柱
は花蠟燭のやうに日増に太つて行く。

山のキペレツタよ。
消えかゝる虹にも似た斜陽の中を

三色堇のやうにひらひらと雉が舞つて行く
粉雪光る落葉松のスロープを
降誕祭の町の方へ——

都會の素描

木下夕爾

1
日曜日——。僕らは幸福をポケットに入れて
あるく。時時、取出したり又ひっこめたりし
ながら。磨かれた靴。軽い帽子。僕らは獨身
者のサラリイマンです。さうして都會よ、君
は何時でも新刊書だ。オレンヂエドの風の
あと、見たまへ、あの舗道の上、またもやブ

ラタヌの並木は一齊に美しい詩を印刷する。
爽やかな音楽とともに。

2

百貨店。——エレベエアアよ。気が向いたら
地獄まで墜ちてくれたまへ。天国まで昇つて
くれたまへ。——ここは屋上庭園だ。遠い山
脈さうして青空とアド・バルウン。ああ今僕
らは感じる。あの金網の動物たちよりももつ
と悲しく、都會よ、君の巨きな掌に囚へられ
てゐる僕ら自身を。

からす

幹山伸二郎

亡母の骨壺の白い思ひ出

静かな國へ、

天使等よ一條の弔列となれ。

手紙

きたかぜが吹くのでランプを消すと

少女はまぶたの向ふでサヨナラをする

私のまぶたから少女の指先につながる度しい

文字たち

文字たちが、ひらがなたちが

北斗星のやうにまぶたを濡らして私を淋しが

らせる

(日記に白紙の頁が幾日つづいたらう)

とりのこされたやうに
爪色のたそがれがくると
うつぶせのまゝ私はウトウトと眠つた。

浅春断章

關 旦美

☆
冬が終つた。眼のさめた木々がみどりの芽を
ふき揃へはじめた。日増しにふとる明るさ、
日向のぬくさ、私はしきりに眼をみはつた。
そして私の凡庸な二十三の青春がはずみだ
す。私は川に沿うてさまよひ出て、冬に負う

た傷をあらひながした。猫やなぎは白に銀に
澄み、立木のかげも明るかつた。私はいつの
まにかキューピットの射おとす矢のことを思ふ
てゐる。さうしては思ひきり肩をそらした。
人々はゆつくり楽しさうに歩いてゐる。あた
らしい歌、やさしい歌、私らのわかい歌。ど
こへいつてもぼうと水をふくんだしろい月景
のなかにひびいてゐる。

☆
植込の枯れたきいろい草に芽があをい。高い
樹の梢でいきほひこんで鳴いてゐる鳥。私は
それを聞きながら、遠い山の上をそめる夕焼
けを眺めた。しだいに暮れる日に、藪のなか
の残雪が紫いろに光る。そこにも何か動い
てゐる。もはや私は何も思ふまい。私は目を

とち知らないふうをしてゐればいい。

早春

小山内 春

生活に疲れ果てた足を引きすつて
私は一人早春の川岸を歩いた。

悲しげなよしきりの鳴聲がきこえる

風に枯あしの戦きよ——

鉛色に黙りこくつてゐる——空よ——水よ、

それは私の青春のやうに色彩のない風景——

私の胸には油にまみれた冷たい

鐵くづが蟻の如くたかり

私の心臓をボロボロに咬み割いてゆく

土手の枯草に坐し、破れた靴を眺めつゝ

私はビュリタンのやうな

自分の生活を思ふ。

三月のひとり

木下 夕 爾

ひらいたパラシユウトのやうな空の下、僕は
マンドリンに似た坂道を登つて行く。明るい
一面の桑島。頬白たちが尻尾で音譜を描く、
早春の音譜を。——徑のほとりに新らしい墓

が、墓の上に固い雪が、そしてその上に澤山の
の紅い木の實が、貧しい神の、それとも僕の
精神の祝祭のあとのやうに。

孤獨や悲哀をギタアの穴に押込んで、地の窪
みに樹樹のかげに消えのこる美しい悔恨の雪
を踏んで、僕は野の涯を歩きまはる。それな
のに、もう春は僕よりもつと早く、もつと
遠くの方を歩いてゐる。

枯草の上。鈍豆型の雲の翳が大股に通りすぎ
る。猫柳よ、母の微笑よ、優しい人の肌の生
毛よ。猫柳の足もとに水の流れの歌を聴く。
昔の歌を、僕らがまだ傷つかない日の歌を。

僕は遠い野を歩いて行く。ああ陽に向いて立
てる樹木。枝枝を透かして、空は青のリトマ
ス試験紙だ。僕のペアトリツチエよ、背の高
い草木を分けながら、今も探してゐたペアト
リツチエよ、疎林の一簇の莖のやうに、何時
までも清らかに暮してくれ。

碧い硫酸銅いろの湖。つめたい水。小禽の死
骸や破かれた楽譜が泛いてゐる。誰かの、鬱
積した冬の弾丸が君らを打貫いたのであらう
——ああ弧を描いては、翅の黄色い小禽が水
を浴びる。水を浴びる。幾つも小さい虹を積
み重ねて。

燕の歌

スミ・マチダ

Teri teri teri 燕は歌ふ。若い父親の鼻唄を泥を銜へて荒んだ舌を、熱れた茱萸の實がなめらかに癒してくれる五月。茶匙のやうに胸をはり、ゆるやかに纏れる風と一緒にサーカスの高い天幕で私は頬を磨いた。登場待つ間のつれづれに踊子らの打つ花骨牌の音よ。柵の駱駝の淡い睡眠に、遠い鞭のやうな悲しみを響かせないでくれ。

Teri teri teri 燕は歌ふ。こみあげる想出を過ぎた日のエレジイを。北回歸線のマストの

上で、はぐれてしまつた父母や兄妹のことを遠浅の磯の蠣族にシャツを脱ぐやうに傾さねばならなかつた颯風の夜の幾枚から翹せだの敷きを――。

Pie pie pie 硫黄のやうな嘴を開け、酒樽の干してある庭に向いて、なにを子供たちは訴へるのであらう。若い父親は、もう背き去つた妻を忘れる。けれど他見には快適なこのフイギユアよ。夕靄の中のスカートをはいた藤波のあたり、黄金蟲の幼蟲は居ないか。

Teri teri teri 燕は歌ふ。望郷の歌を、故郷の鼻唄を――。暖かい淡紅色ロゼットの聚雨に濡れながら、紫雲英畑や菜の花はいつせいに咲き誇

る。南國の満月の晩に酋長の着る禮服のやうに。

曲つた徑

青海 清

鏡のやうに光る入江。その中で小さな避暑地の街は水にゆれてゐる。さかさまにうつる森や並木や白い坂を下りてくる犬。無色な波に浮き沈む遊覧船の赤い吃水。

曲つた徑をでると現はれる海。そこで私達はいつも木に凭れて鯛をきいた。けれど、鯛のもう鳴かなくなつた頃、私の傍らには従妹の

姿がゐなくなつた。生毛の透いて見える美しい頬が……

曲つた徑、そこから海が現はれる。私は夕暮の木に凭れて鯛をきいてゐる。ああ沈黙の底のこの騒擾。この音は私の中から鳴り響くのかもしれない。――黒い候鳥が消えてゆく。

従妹のゐなくなつた木立の向ふの部屋には、夜になると青いランプ・シェードの灯だけが点つてゐる。私は確かに握つてゐたあの冷たい手を考へる。部屋の方へ私は夜の廊下を歩いてゆく。曲つた徑を出ると、寒い色の海が……

私の海

村上 勤

波止場の酒樽が陽気に積まれてゐる時がある
波止場の小麦袋が陰気に雨に濡れてゐるとき
がある

燈臺の突き立つた姿が美しいときがある
燈臺の不安氣な瞬きが憐れなときがある

鷗が素的に派手に舞つてゐるときがある
鷗がとても乏しい歌をうたつてゐるときがあ
る

汽船の銅羅の音がかなしく聞えるときがある
汽船の船名板レキネイボードの名がなんとなく楽しく見える
ときがある

私の胸の中にもそんな明るい海がある
私の胸の中にもそんな暗い海がある

今日は阿房のやうに、明日は聖者のやうに
浮標ウキヒコが揺れてゐる、鹽辛い波の上で……

海猫の歌

廣田眞一良

I

青くと低い海と空のさなかに、鷗たちは濡れ
たハンカチをふる。私は手をふる、ふる、旗
でもあるかのやうに、見送るかのやうに、
BO、BO、BOO——私の、不逞だつた解
纜を、むなしい航路を、今また見送るかのや
うに。つい、みんなふりきつてしまつた。

II

それは、白いなみがしらと、掌をたゞいてゐ
る、呼んでゐる、こみあげてきた浮標であつ
た。ときをり、鷗が下りて羽根を憩めた。そ
れは、白い cravate を締めたやうに眞赤な胸
を張つた。けれどもまたしても糞をしてとび
たつてしまふ。それは白いなみがしらと、掌
をたゞいてゐる、呼んでゐる、ひたひたと。

ああ、劇しく晝の傷づくごとく暮れかゝる。
鳴咽だけが、ひとり、牡蠣殻のやうに残され
て、年をかさねた。

III

港の歴史はくさりに似てたあいもなく錆てゆ
く。文字のかはりには人々はいろ／＼な骨を沈
めるのだつた。鷗は魚のゐない夜の水際で、
忍びやかに犯した罪の禊をする。また、私は
私のぼつちりと舷燈のやうなエスブリを漾は
す、波が一心にもみ砕く、そんな灯をながめ
てわたつてきた杳い海峡を再び記憶が愁然と
わたりにゆく間。

青 梅

棚 木 章

啄木鳥の庭に来る日は障子を開けて、蒼白く
瞳を凝らして軒先の青梅の實を數へたりする
—— 手を入れない生垣の芽立が胸を衝く様に
立竝び、花の無い庭。狂ふ焦心の黒き極彩の
蝶よ！ 灰黒い蒸氣に腐つてゆく常緑樹の落
葉よ！ 蒼鬱な緑の散光の中を、ぐらりと揺
すぶつて遣場のない目に母を呼ぶ——。活け
られた野茨のあかるき色よ！ 落葉焚く白き
煙よ！ 消えてゆく肉の燻りに、白き葩ほど
の華やぎに、和みゆく心、ちろ／＼と燃える

平野の氣象學

松 峰 透

炎に暫し思念の絲を燻らせる心よさ。ひらひ
らと輕んだ心のひまを斷刀の様に重い鈍音が
落ちて——ア！ ラッセルを開いた様に息を
詰る。掃き目乾かぬ、砂の上ところがつた殘
骸。風もなく青梅が落ちる。—— 又しても古
びた碾臼の様に憂患がのしか／＼つて来て、粉
粉につかれた心像から呆然と目をやれば遠い
山の頂き蠟の様な雲は白日の寂寞に息をひそ
めるのか。噫！ 心を一杯にして、干鯉の様
な手をいたはりつつ私は又障子をしめる。

若い桃の實がおちる、庭のどこかで。音樂會
の青い招待券に晝螢がとまる、水邊の厨から
來たひる螢が。——

ンに映る、水と陽の、幻燈寫眞を見たまへ。
スワンが、ものうげに叫ぶ、この平野の氣象
學をききたまへ。……

雨 後

青 海 清

熱帯魚のゐる坂の町よ。蜂蜜甕の蓋にうつす
らとかかつてゐる、夜來火山灰よ、胸には甘
い痛みを、黒い肩には受難にも似たささやか
な重みを、吹雲のやうにあびながら、私は昨
夜そこを通つた。——

濡れた芝生に木椅子を持ち出す
コップに含嗽劑を溶解する。
椅子の上のこつてあなたは石榴の實をもい
でゐる。
木々の間には、遠くに移つていつた聚雨の音
がまだのこつてゐる。

泡のやうに柔らかいパセリ畑に、今日は騎兵
斥候が來てゐる。そして食堂列車が通過する
フオークや、ナフキンや、美しい瓶や、旅愁
の頬やを、束の間、花蘂の崖に残して。
ああ綺羅めく午後 of 明快さ！ 蘆のスクーリ

急にあなたは私を指す。

見ると、椋の青い幹から枝の方へと歩いてゆく蠟細工の蟬。

いま生れたままの幼い蟬の透明な翅や、青い糸條のみえる脚。

それは見てゐる間に美しい色で彩られる。

頭の上でカナリイの聲。

振り仰ぐと、光りながら落ちてくる枝の滴。

滴に濡れる籠の中の石榴の實や私の手の甲。

それから、あなたの明るい頬、その頬で質の泪が芝居めいて微笑つた。

秋立つ日

三城 えふ

その年の夏、私は小さな避暑地にゐて、傍らの従兄とよく蝸をきいた。そのふちの廣い藁藁帽子に、蝸の歌をしみこませながら……

けれど、蝸のもう鳴かなくなつた頃、あのがたがたの無蓋馬車で、従兄は、私の心を費ひ果して、情なかつたひとのやうに去つて行つた。谿間の小徑に、しばらく見覚えのある衣服をうごかしながら。

私は夕暮の木に凭れて、そのふちの廣い藁藁帽子を振つてゐる。裏返しながら、ああ、いくそたび、蝸の歌がしみついてゐるこの帽子を振ることか。——暮れゆく夏と、いまひとつのものを見送るかのやうに。

初秋は少しづつ樹々を振つた。ともすれば曇りやすい双の瞳に、私は落葉を見る。

痩せた撫で肩の上を軽く敲く落葉を見る。

蝸の歌

櫻井英樹

蝸がなく とほくちかく それは氣紛れな神

々が鳴らすオルゴオルのやうに 木立から木立へと移り住みながら
すでに日は凋み 蝶は古い 人住まぬヴェラ
ンダの夏は褪せて 空ろな窓にはなんの呼聲も聴えない

蝸がなく 東の間を耀く聚雨のやうに 木梢にさゝやかな六絃琴を弾いて

暮れまさる湖の上 あゝ一點の白帆を灯して
慕ひよる秋の韻律よ 喪はれた日々への挽歌よ

蝸はなく このひとゝきを高まる潮騒のやう

にとりのこされた人々の悲哀を涵して。

晚い夏

櫻井英樹

樹樹の繁みがぼくを圍繞く、濃藍の垣牆のやうに、樹のかげにぼくは坐る。梅を彫る日光と黄蜂のかすかなひびき、素朴な悲哀を養ひながら、脈うつてゐる織い血管。

貧しい庭に黒々と光る花の鋏。誰かそこにゐる。ひつそりと灯る花蔭に。父が、祖母が、滅びた家族がゐる。無事に死んだ人々が。

あゝ午後のけだるいぼくの胸隔に、絡まる灰色の蝶よ、軽い咳嗽の虹にのつて早く消え去つておくれ。風鷄に陽が移る。あの透明な碧空へ。

樹のかげにぼくがゐる。さうして滅びた家族たちがゐる。書物よりも静謐に。

検温器の岡

スミ・マチダ

私は病むでゐる。廊下の隅の鐵亞鈴や登山杖に空しい鹿をつけたまま。私は病んでゐる。

白粉や小禽の翹の滯れてゐる針葉樹林のベンチを訪ねることもゆるされずに。フェン風吹く國境の山尾根を超える約束も果さずに。私は病むでゐる。眼ぐすりの匂ひのする秋晴を——青い漢籍や赤い鞍のしまつてある土藏の窓で、老いた鶴の氣配で物を捜す父をブリズム色の視覺の端に焦點して。或はダアリアのはるかな庭で、黒い心臓を射る妹の俊鋭の矢たけびをきながら。私は病むでゐる。覺悟してゐる。引潮の海のさわめきを遠く鳴らして睡り行く肉體の表情や、いつも優しく立つてゐる看護婦の燈臺や、粉藥紙の鷗や、それらを呼びながら眼ざめねばならない満潮の溢れ盛る高熱に、生涯の思想を寂しく秘めて。——ああ、やがて、コオヒイ・サイフオンの

曇りつゝ歌ふ朝毎、あのテニスコートに霜が卑弱な検温器を眩ゆく屈折させて、私の額までも、新鮮な銀で彩るだらう。私の耳の凍傷は、たれも居ない部屋で、紅玉のやうに映えて寒冷な聽覺の營みを守るだらう。剝製の鷺の翼が、大きな翳をベッドに及ぼす夕ぐれ、私はすべてを理解する。愛と憎しみの境界を、くつきりと斷つた青い忍辱の瞳で。

秋の思想

スミ・マチダ

映畫館の紅く堅い椅子や、油照りの競馬場や

微風の中の砂山や、それら、豊醇な夏の記憶が、肉體の一部に、ほのかな疼痛となつて残る。町のプラタヌ並木には、早くも鳴高い堅琴がかけ互され、市場歸りの人々は蟲媒花しげる竹垣の向うを行く。綿のやうな仔山羊をいたはりながら。林檎籠を、つやつやと匂はせながら。

初秋の私の仕事。それは、落雁噪ぐ蕎麥の花畠に、蜜蜂の巣箱をいくつか移すことだ。夕川が、耳輪ほどのやさしい渦を作りつつ流れる水邊の厨で、風雅な季節の献立表を編むことだ。マンジュシヤゲ咲く竹林をさまよひ、フランス刺繍の黄金絲のやうに眩ゆく散る金木犀の坂を、チカチカと來る人の姿を待つこと

とだ。ああ、今日は飛行機日和、新刊書の頁を切るあの紙ナイフの閃めきで、低いプロペラが頭上を掠める。疲勞の後の純粹の默考よ。思索と白い掌を斜陽に晒し、どうだんのバラソルの下で私はねむつた。葡萄酒の鮮麗な大カツプの底にうち沈み、私は夢に溺れた。

山間地

小笠原 阿伊

憂鬱な暗い目をして鴨は谷の上を渡る。向日葵は雨に打たれながら、しきりに身をもがいてゐる。この花もいつかは、燃える日のやうであつた

が。

僕も僕をもう宥めやうもなくなつてゐる。

手にした樺の枝切れで

水際の葦の花は曇つた底に沈められる。

山毛榉林の暗い繁みのなかで、山の人は木を倒してゐる。

その響きの消えて行く間、泣いてゐる幼児のやうに、

雨はしばらく黙つて聽いてゐる。

河洲の葦間に樺の枝を突きたて、僕も黙つて聽いてゐる。

西 境

藤 やよひ

あの鳥は約束をもち

あの鳥は駆けてゆく

竟にあの影は見えなくなり

綺麗な一つの意味になり

私を誘ひ

私を呼び

雲になり

虹になり

夕空のかなたに

ふかく 深く

噫そこに何かと終つてゐる 何もなく。
凡ての昨日だけのこして何もなく
鳥よ、
鳥よ、

公園

青海 清

I
石に雪が降る。樹に雪が積る。分れ岐れの小
徑を背に、しばらく私はたちどまる。冬の薔
薇に雪が積る。まもなく私ははげしく咳入る
噴水に雪が積る。鐵柵に雪が積る。犬が通る
その後から狐のやうな犬がまた通る。小徑に

日が淡い。

II

遠い空が曇い。尖塔の十字架に雪が積る。神
が私に齡をくれる。悔恨の火の粉が雪にしむ
やうだ。胸があつい。池の薄氷に雪がつもる
金綱の中の動物が不意に騒ぐ。亂れた髪を搔
き上げる。木椅子に雪が積る。腰かけてゐる
黒外套の露西亞婦人。その鼻が赭い。

III

芝生に雪が積る。記念碑に雪が積る。私は碑
の石に鉛筆をあてて蕊を削る。手帳に曲つた
文字を書き込む『すべての虚構の葉らを拂ひ
落して林よ寒冷の空に思念の枝を組め』噴水
に雪が積る。樹に雪が積る。手を清らかに洗
はう。

旅装

三城 えふ

いくつかの樹の枝や、雲をくゞりながら、こ
の知らない土地の青空の下を、私たちはひと
日あるいた。

誰にも出逢はない道では、ときどき、微風と
すれちがつた。

山のおもてには、秋がすすきの風に銀色に光
つてゐた。岩菊を手折りながら、娘の優しい
姿は少しばかりの愁ひをすら含んで、山道を

のぼつて行つた。

道みち、飛び去る雲や、下り群れた鴉たちに
私たちは幾度も立ち止つた。

空の彼方につらなる山脈には、夕方の雲がた
ゆたつてゐた。鳥々のほとりを、帆を張つた
船が通りすぎる。鴉の群は遠く呼びかはしな
がら、海の空を、あわたゞしく駆け抜けてゆ
く。

娘はいつのまにか、巖石の上で、暮れ沈む海
にむいて遠眼鏡をあててゐた。

一 系

藤 やよひ

I

小禽たちは母の肩に睡つた
母の貌にほそい月があつた。

II

ときに

母の姿は驚だつた、夕べ

眸の乾草よ、……アルトの箒星のしつぽに似
たる子守唄よ。

III

そして畢りに

ぐるりの小禽たちの輪光の中へ母は靜に凭れ
て

軽く

かるく

軌んだ……

小禽たちは羽根の重みに

白い透明な母の臉のあちら側へ鞆の様にの
めつた。

IV

出發だ！

母の内部にこの世の血が流れた。

童 畫

宇江村

榮

しらじらと、

うそのよそほひに、

ひとみをふせる。

おなじことばを、

おたがひのむなそこに、

ふせてゐるのかしれぬのに……。

けれどもそのはなびらに、

ふれるおそろしさにふるへつゝ

また、ふかうなじかんを、

くるしみながらつみかさねる。

こころとおこなひと、

せなかをむけてかけてゆく、

ふたつのまがつたせんやうに、

ぼくは 少年。

あなたは 少女。

唄

赤穂林藏

嘗てうちに在りし花は逝き

歌は混濁の中へ墜ち

鳥は胸裂きて翔び去りて
身は荒寥たる山野を這つて蠢く
怖れもなく 望みもなく
いま昏迷の霧のなかにあれば
ああ むかふの河のひとすちに
わたしはなほ歌ひに歌つてゐる
むかし在つたよりも烈しく愛しく

繁 み

西田春作

化粧するが、わづかな時間であつた。
いそいそと、
清純に、

美しく、

うる、うると、萌え出でて、
午後の白雲に戯ぶは――

おい、三月の、ふいるむよ
あわたしい想ひをためてあをい色に顔へる
ことはない。

微風と微風と晝の月はある。
草に、草に、――揺れ。揺れ。

はんがりい

鎌田安雄

日光の透明なはんがりいの邑で

私は歌をうたはう

牧場で風呂敷をかぶつた娘とさゝやから
背ほどのびた麥原でかくれんぼをしよう
さうしたら私の憶ひ出も美しく
雲がとんでゆくやうに私もどつかにとんでつ
て

すべてを忘れてしまふだらう
日光の透明なはんがりいにゆから
さうしたら私も透明になるだらう

日 記

金子美美夫

窓といふ窓から

文字の軍隊の行進を今日も見送つて
歴史の幾つかを繰りひろげる

(俺といふ言葉が紙面を威張りちらして)

冷却した血と
エゴの殿堂と

思想の破片と
そして其處には何時も

秋風が吹きまくつてゐる

此處はまた或る女が悲劇を演じて
嘆息が頁をうづめてゐる

眞白な平野にレールを敷き
頁の谷に鐵橋を懸けわたして

バイオニヤよ

(そしてお前は途々の地誌を綴る)
(又此の世の歴史編纂官でもある)
だがまて 白鴉のひそむ森を抜け
人魚のみごもる岩かげを通り
凍てついた月光を浴びて此の路線は
一體何處へ行きつくだ

告白

く に を

黄昏の黒潮にのつて
寄せてはかへす私のくづれた姿態

ステツキはバイヤの幹で作り

蜘蛛の絲であみ上げたシルクハットよ、光れ
春風に吹きかざす暗翳の多い個性から
玉蟲色の翼つけた小兎がはねてゐる。
アツハツハ 大空よ
頭蓋骨のトンネルをかけめぐつた狹が顔を出
したら まつげがそりかへり水晶體がちぎま
つた。

戀文のタコのある掌よ 椰子になれ たくま
しく お前にふさはしい媚態ぢやないか

虹をふみはずした私の告白
胸元一杯にこぼれるアルコール漬けの花束い

つの間にか湧いてくる霧又霧であつた。

歸雁の丘

クニヲ・ク ガ

黄昏の女學寮^{ガールズ・スクエア}では、早蕨の料理法を講義す
る。七寶のブローチを失した少女にも、祖母
のやうに親愛の夜が来て、旅行鞆の中のひび
われた香水壘が匂ひ出す。

あゝ雁も、もうシベリヤの方に歸らなければ
ならないね。

紅い三等乗車券ほどに、咲き初めた牡丹櫻の
梢で、うろこ雲のマフラーを咽喉に巻いた一
群のメツセンヂャー・ポイよ、その嘴に付
いてゐる若い葦の芽よ、銀のチエインのやう
に北へと轉ずる羽搏のアレグロの下星座は、
いちらしく、まばたき燃える。花火のやう
に、花火のやうに。

憧憬

秋篠ナ、子

その頃
丘はさびしいははの肩に似てゐた
風がくると

耳のはたで芒はさやさやと傷んだ心臓のやうな音をたてた

説話

丘からは海が見えた

檜山享夫

しかし黒いリボンのやうな列車が忽ち海を隠した

ちちの心に目隠して運び去つた悪魔にけれどわたしはその黒いリボンにこつそり憧れた

はははひねもすを溜息をついてみた

夜更けてそつとお月さまが生魚を食べるもの憂い霧は足の方で藪鴛を聴いた影と匂ひとが入りまじるときに未通女は指を傷めて草かげに眞珠を掘る石を投げると遠く月にあをい魚がはねて未通女の胸は沼の形に展けてくる

わたしは日毎丘に登つたさうして海を眺めては

春來

西田春作

いつしんにひとつの影を待つてゐるのであつた

花は葺き

花はひらく

挿繪

または、あは、あはと揺れてゐる。

青海清

花蜂は金を塗りて、

野べに、やさしい春が息吹く

みどりに春が息吹く

あをい空よ

陽ざしのさなかに。

若い青葉のにほひに

おめ おめとさはぎ藁と藁とのあひだから花

粉のついたわたしの麦笛。

お前の靴はオレンヂ色で小さな水溜りをよくとびこえ

堤防沿ひの青い芽のいつばいな並樹路

私たちは自轉車にすれちがひすれちがひ

メリメエの物語に夢中になつて日に幾たびとなく往きかへり往きかへり

あの風に翻る黄色な表紙の小さい本

ああさうさう飛んできて栗に挿まれた紋白蝶

お前の微笑よ遠い日の私達……

春

(潮みどりに)

鈴 しのぶ

春の帽子振らう。

ヴィーナスの歌を聞かう。

こんなにも若い青空。

花ある胸。

新月・新月を食べよう。

鈴が走る。

驢馬が驅ける。

何だか何だか優しく通る。

春の帽子振らう。

小鳥がゐる胸。

さあ丘をのぼらう。

戀 歌

三 枝 響

頬をあからめ

山壁の黝き村落のほと

ふるへふるへて葦笛を吹くこの少年のうたを

聴けよ。

その湖のさなか、

幻ならば消えよ、

ひと握りの島ありて、少女ひとり鶴のごとく

見たり。

古風なるはやしなれど

錦綾のごとき波の繪を掬へよ。

幼き想ひに似て愛するよしなき節なれど、

少女よ、

軀にともせし淡き灯に装へよ。

夜々山深き荒神のもとにぬかづき

せめて、少女ひとり

河裾の宴より遙かにあらしめよと祈りては、

聴けよ、荒然と泣く少年の絹絲のごとき戀歌

を。

雪のサンタマリア

津 田 英 介

七月の羅馬の丘に雪が降つた。

全ての示現が法王リベリウスにも

聖瑪利亞大寺(Santa Maria M. giore)の建立

を告げた。

奇蹟は、エスキリヌスが丘に來た。
圓堂にも回廊にも殉教者は居ない。
聖堂は平和と夢とで成された。
長者ジャンは炎熱の中で
それを目撃した。
嗚呼、靈しきは「聖マリヤの雪殿。」

若い日

秋篠ナ、子

村は日向のやうに穏やかであつた
私は終日松の木に架けたハンモックに揺られ
て佛蘭西の小説を讀んでゐた
夕方、遠くの野から煮物の匂ひにまじつて祖

母の聲で優しく私の名を呼ぶ時まで
或日、小説の中の男のやうに従兄が私の木蔭
に佇つてゐた
白いYシャツの襟に都會の香をしのばせなが
ら

そして私の靜謐な日課は破れた
私達は肩を並べ合つては少し疝高い聲でさざ
めき合つた
四年前のフェルムが廻つてゐる小屋や、漁夫
の娘が泳いでゐる荒れた海邊や……
私はしあはせにうつとりと疲れた
やがて従兄は一枚のハンカチのやうに村を捨
てた

その日から、私はもう薄汚れたハンモックに
歸るところを失くしてゐた
鯛が残んの命を傾けて鳴く窓で、私は村を棄
てる日のことをこつそり企んでゐた

比叡

三城えふ

夕映えに茜の空を
麓の寺の鐘は、ひつそりと鳴りわたる。

かるやかな樹々の梢は
豪華な落日にむいて傾き
大原女のすがたは

たびたび山を降つていつた。

わたしは寂寞に疲れた。
道にたゝすんでは
梢の一劃から、夕暮の湖水を指呼した。
頂きの霧は麓におりてきて
湖畔の小さな村を、遠くかすめてゐた。

娘は仕事の手をやすめて
發車するケエブルを見送つた。
わたしはひとり
夕暮の木肌によりかつて
霧の立ち罩める、遠い山脈を眺めてゐた。

眼

藤庵武志

眼をみはらうよ。
或るものに、
眼は
かたつむりの
眼の如く
空間に
ぬつと突出る、
けれど
皇帝の衛兵のやうに
霧はさへぎり

霞は擬装する
だまされてはいけない
目的は只一つ
眼をみはらうよ、
眼をみはらうよ、
灰いろの黄昏がくる。

翅の生えた猫

南原和兒

七月の風にとけて
美しい絲になる白い花の
白い感情
私は首をまかれ

三毛猫の背に疲勞する。

國境

虚木 一

終日風は
ビオロンを震はし
三毛猫は重い木棺の蓋をおしあげ、おしあげ
少女は黄昏に
眞皦い褒章をばらまいた。
星に光がたぎる頃
カーテンは苔の生えた墓石と變り、
三毛猫は傷ついた爪に
褒章をまきつけ、まきつけ
星の招電に
天に一つの胡弓を忍がいて消えた。

…：牧草が乾してある邊はやはら秋陽に黄色
く映えて 杳くは林檎ばやしか 藍色に霞ん
だところから 圓を張つた碧空に白い雲が翔
んでゐる。

丘の上。腰かけた二人は同じ景色を見てゐる
のだが…：

つまり國境線が美しすぎる爲かも知れない
つまり、國境の赤い線がなければいゝのかも

しれない。

人々の砦は餘りにも頑固だし 長城は萬里
人々は餘りにも多くの國境を持ちすぎてゐる
のかもしれない。

海老沼泥路

錯綜

女は香水が好きだし 男は洗濯も嫌ひだ

二人は 今日も ポンポンと鐵砲を鳴らすと
とだらう——

一見、平和は平原である。そんな事はデマだ
と言ひたい……くらゐな。

「じつと見つめてゐると紙に穴が開く。」
といふのを詩にして悪い事があるだらうか
そして又、

「戀を忘れ、私を忘れ、子を忘れ、人を忘れ
民族を忘れた。」

といふ詩を作つて悪い事があるだらうか。

錯綜無……

私は煙草を喫つてゐる。

彼女が戦争の話をしてゐるでせう。

鈴が街街を突刺してゐるから。

前髪の歌

三枝 響

なにがなし

きみは眞紅のウクレレを持つ

その丘から

朔北に展けた秋は暮く

點々とゆく 匣車の彩られ匣車の鎧はれて

僧侶のごとくきみは悼歌ばかり

黄昏は せめてきみのユマンテを灯せよ

なにがなし

戀に縋紗を装せ

あたらしい星圖に辿り きみよ

眞紅のウクレレをかき鳴らせ

いま元結を切らう

前髪を風に振らう

老子

藤 やよひ

深呼吸するやうに

松は錨をおろしてゐる、それは深い深いかけ

の地の齡のおもみほど

愁ひふとああ提げて人は

あをいあをい穹のひかり滾す枝々から

幻をみあげみあげ

さうした松の群れしづかな雲の翳りかける風
のそのなかにゐた

旻

松本 清

はてしなく 胸はだけ 湖となり 湖となり
つゝましき 他人の 姿かくして をどるな

もろきよろこびにまよひ

ゆめにひきすられ

ゆめをひきすり

こゝまで はたちのあきのほとりまで

爵々と とほとほとあゆみたれど

いましゆうさうのきびしさに

ちらんはなびらちらさじと

くちびる噛みしむるも

ああ しんじつわがみの

いとほしさゆる

り、すなほなるその肌理は 頬をもやせし
幼な日か、日とともに遠くなり 喪心に胸透
きて 北へゆき 北へゆき。

少年の日の夢

白石道人

わがみいとしさの根からはえでた
儂ないゆめのくさばなであつた

てんじつ翳ればいちはやく

いろあせしほるるよりすべなく

てんじつつかのまかがやけば

貧しきはなびらふるはせて

靴

伊原隆夫

暮れ残る空に 白蠟色の塔が聳え

中 一日は登石の向ふに沈み 町は静かな谷間の

影が鞆のやうにはすみ それに合せて靴が鳴
る

やがて子供達は黄色い冠をかぶつた
——お月様の心づくしでありました

靴から鳩の翼が生え――

風船のやうに天へ上つていつた

それゆゑ天使達の靴音が

あんなに遠い空から聞えて來るのです

晩 秋

關 且 美

風は肌寒むげに 野をふいた

光はちぢかんでか動きはしなかつた

菊畑に花のかほりあせて

赤とんぼの影はうすく

うろこ雲は山ぎはをたゞよふてゐる

君よ

かくして今日は何ごともなく暮れたといふのか

世はやすらかに

わたしたちは倅せな時をおくつたらうか

目をつぶれば

いづこからかすさまじい砲火の

決意の一弾一弾が

地平のかなたに炸裂するのがきこえる

朝に夕にそのものおとは

青春を賭けるわたしたちわかものの

猛々しいたゝかひのとどろきだつた

君よ

野はすでにきいろく枯れてゐる

樹木の梢に葉は枯れ落ち

景色は息もつまるやうに静謐である

君よ

しかしわたしたちには心の風ぎはなかつた

哈爾濱の冬

――旅の雪のついた外套――

青 海 清

冬枯の林よ

林に巢を編む鳥よ

淡い夕日のなかで

この數多い墓標を守つてゐるのは

かなしいことだらう

「大墳墓の地」といつたのも

嘘ではなかつたと思ふだらう

崩れた煉瓦塀に背をもたせて眠つてゐる

おや！ クロボトキン……

ぢやない、喘息病みが咳をしてゐる

梨の上に雪がふつてゐた

モデルン座の夜のバンドがなつてゐた

夜の床に雪がちつてゐた

半帛にニコライ一世の銀貨を一枚

包んで藏つてた國籍のない踊子

「東洋の月つて寒いのね……」

憧憬

林 洋太郎

みづのそとで
もぐさに透けてくるわづかの陽の光り
わづかではある でも
その ほんのわづかなのがいゝ

ふと
思ひつき
その朝 種々の草花を
机の花瓶にさした 部屋は
そのやうな明るさであつた

みづのそこの 魚のひえびえと澄んだ
目の玉に

はげしい魅惑を感じたのはしんじつである
僕は
なを白い魚の目玉の中に
ふかく身をよこたへ
ひえびえと
幸福におびえてゐた。

秋苑の詩

水上フミヲ

丘の上の、農學校で飼ふ傳書鳩は、百日草の
苑（庭）に迷ひ下り、柘榴の白露は、芝生にきらめ
きこぼれる。草入り水晶のやうに――。清流
のほとり、花薊の蔭を、青鮎がきらめき過ぎ
る。少年の手に光るナイフのやうに――。

孔雀草の花群に、蝶々は純心な夢をゑがく。
やさしい人の綴る刺繡模様のやうに――。
金木犀散る池畔に、私は雲母摺りの萬葉集を
讀む。古典への思慕を秋の女神たちが織りな
す、光と蔭の、華麗な縞模様、紋章の如く
點じながら。――

秋窓譜

伊丹右京

葡萄稔る丘邊の娘たちよ。遠く、近く、ポプ
ラ並木の梢に鳴るオルゴールを聞き給へ。新
刊の詩集よりも美しい季節の哀愁を――蜜蜂
の巣箱を守る花鳥の少女は、昨夜、街で觀た
佛蘭西映畫に、甘い感傷を托し、サルビヤの
花はフィルム（フィルム）の如く爽やかにチェインヂ（チェンジ）する
季節の胸に散る。赤い音符のやうに赤い音符
のやうに――。

I
葛がからんでゐた。木枯のなかでその日
葛は歌つて行つた。颯爽と鋪道をまるんで行
つた。

II

いつも郷愁が呼んでゐる。塵埃とガソリンの
にほひに病んで私の眼は錆びて行く。
ほおろんほおろん錆びて行く。

III

酒場の青い月。あの女の火のやうな肌。母さ
ん私は大人になりました。夜の酒場。
紅バラが揺れてます

IV

大膽にも 私の眼の前で プライドをなくし
た鳶は散るのだ。ああ あのやうに 思ひき
り胸をはり 腕をひらき……

寂靜相のひとり

フミヲ・水上

黝ずんだ雲間もる寂光のもと、孤獨の悲哀を
抱いて私は歩いてゆく。部落の北、鴉群る巨
きな巖々の蔭を茫邈とつゞく運命の坂道を。
枯れ果てた草花のほとり、崖ばたの馬頭觀世
音よ。私の貧しい歌を、現實によごれた精神
の挽歌を、枯芝に埋めて呉れ。歴史よりも靜
謐に。

冷然と聳立つ巖々よ！ 夜々、目に視える魔
神たちの饗宴を張る灰白いヴェランダよ。日

々、そこで鴉どもは歌ふのだが、又しても黒
い家族達は、懸命に翅を振る、振る。黒い文
字を、黒い音符を、北風に撒布してその一片
が、私の額に散る。私の乏しい思考にピリオ
ドを打つかのやうに。

曲つて、曲つて、ほそぼそと部落へつゞく坂
道の下。その古びゆく冬の窪みに、いんうつ
なる貌をよせ合ふて墓石達よ。……妖しく散
る紅椿の白日夢よ。暗い沈黙の底に、孤獨を
祝福してゐるか。やがて彼等の額を、鴉がか
すめ飛ぶ。へらへらと、沈みゆく忘却の軋め
きの、空しい弧を描いて……やがて部落の方
へ。

私は坂道を下りてゆく。いぶし銀の夕雲ひそ
む叢林の彼方へ。祈禱にも似た家々の灯蔭に
人々の重たい心が埋もれてゐる彼方へ……あ
ゝ、雨よりも、風よりも、冷たくやつてくる
夜よ！ 父よりも、母よりも、親しくやつて
くる夜よ！ せめて私の心に、部落の宿命に
荒立つ巖々の精神に、寂光をさんさんと降り
そそいで呉れ。おゝ、沙羅双樹の花よりもさ
びしく、わびしく。

家 庭

木暮晶夫

十字花科の植物のやうに明るい天氣 乾いた
シャツの上に繩とびの影が揺れてゐる 愉し
げに まるで死が輪をどりをしてゐるかのや
うだ 蜜蜂の翅の音 ゆるやかなそのあわた
だしさ 石の門のそばに朝刊と牛乳壘が咲い
てゐる 寂しい花のやうに 私たちの日常が

2

夜になつて緬羊のやうな雨が來た 時間を編
むやうに 堅い椅子の上で 女はスウエター
を編んでゐる 間もなく赤ん坊が生れるだら
う ただ待つといふことだけが人のところを
明るくするやうだすこしみだれた髪がガラス
にうつつてゐる そこから晴れた日の草の匂
ひがただよつて來るやうだ。

春 雪

關 旦 美

芹の葉のうらに鮎の子を育てた
疎林のなかの木はひっそりぬくまつた
シエバアドの四肢のやうな枝に
芽がつやつやくふきだしてきた
あるときはしめやかに雨がふつた
日ごとに澄む青空に魚のむれがおよいだ
わたしは春の近づいたことを知つて
あやまらない季節のみづみづしさを思つた
そしてまた時代がおしうつるらしい
新しい變化をも思ふのであつた

どのやうに變つてゆくであらうか
わたしには分らない

しかしその新鮮な時代の饗宴をひと感じて
わたしらは遠い祖先が柔順だつたやうに
かしく誠實さを抱いて變つてゆかう
それにわたしらは大きく育てられてゆかう
わたしらはまだまだ進んでゆかねばならぬ

小鳥の足あともかぞへられる泥に
明るい光をきらめかせて雪がふつてゐる

花壇物語

林 洋太郎

花壇には金盞花がいつばい咲いてゐた
その向ふで

海はうつくしく光つてどこかへ流れてゐた。

金盞花の莖や葉がゆれるのは

見えないどこからか吹いてくる春の風であつ
た。

僕がこの詩を書くまへからの うつたらしい
飛行機のうなりであつた。

遠い山と山との言葉は

そのひびきに消されて

何を話してゐるのかさつぱりわからない。

それでも金盞花は

だまつて咲いてゐた
きらきらひかる海をこえて
しろい蝶が
ひらりひらりと飛んで來た。

ろまん

島才市

口笛吹いて
樹間の徑を行つて
僕達は入江のかゞやきに立つた
波の手がくすぐつたくもてあそぶボートの上
で

僕達は風のやうに笑ひながら
——それからいさましく漕ぎ出して行つた。

美しい頬が
ばら色に染まるはにかみが
僕の間近にあつて
僕を鷗より朗らかにするのだ

秩序なく話しかける優しい瞳よ
貝殻ほどに可愛い耳たぶよ
いつたい僕達はこの素晴らしい時間をどうし
たらいいのか

夢でない僕達の青春を
小ツぽけなボートに乗せて

あゝ 雲のやうに
雲のやうに漕ぎ廻らう

鬼火のやうな

——旅にて

青海 清

辻で黒い蝙蝠傘があちこちに別れてゆく
石像の手前を曲つて
木の橋をわたつて……
水に青葉がちぎれてゐる

露西亞寺院のガラスに雨がしぶいてゐる
眞鍮の把手がひかつてゐる
狼のやうな犬が芝生をいつたりきたりする

ぼんくらな桐の木の水溜りよ

僕はそこに映されてゐる、
暗い思念の締木にさかさまに礫られて……

頭の上の桐の花よ

鬼火のやうな遠くの灯りよ

そして罪の匂ひのする夕暮……

ああそのやうな僕の境涯

瘋癲院のながい煉瓦塀にそふて

さあ、かへつてゆかう、

流竄の天使を眞似て

春 雷

町田 澄

若楓の陽射す厨で妹は幼ない香魚かういを焼いてゐた。

白牡丹のさゆらぐ庭で僕はオペラ・グラスを拭つてゐた。

それから、鶯鳥さわぐ石垣の村や、蒼い穂麥の畑中を切ない程の郷愁で、ああ、あんなにも一筋に歸つてくる兄を待つてゐた。傾むいたオートバイの車體に、地平線の午後の雲や微風の中の楢林やを、びかびか映しながら赤土山の斷層を、あああんなにも一筋に駛つてくる兄を待つてゐた。

僕も妹も既に語ることに疲れてゐた。戀を失なつた兄を迎へるになにをもつてしよう。それさへも考へつかずに、あの眞珠層の結晶が音もなく毀れる悲しさに眼をつぶつてゐた。

音もなく音もなく、ああ、しかし自然の加擔はこの家族の上にあつた。

見よ、轟然とはためき互る春雷を、地下深く睡りあきた幾多の魂も、ひねまがり散亂した思念を濕潤の地下水に注ぎ、いまはかたへなる自れの骸骨に綺羅羅と響き入る天のチンパンニーへ、銀笛のやうに堅琴のやうに合奏しようとする。

緑の時間

島 才市

緑は坐つてゐる二人の周圍にうるうる萌えてゐた

潮は緑のむかうに光つて流れた
幸福は私達の胸の中で潮鳴よりもかそかに鳴つてゐた、

どこかで泉の湧いてゐるやうな氣がした
ゆたかにあふれた泉だつた

——それを覚えるだけで

私達は語ることの必要を感じなかつた
それでよかつた

充ち足りた時間を

旋風のやうに輕快な蜜蜂の羽音が揺れた

光つてゐるのは
あの雲だけではない
草の風だけではない

私は光つた髪の毛の持つふしぎなうつくしさを
見てゐる
優しいその匂ひを いきいきとしたよろこび
のすがたを

梅雨ぐもり

關 且美

午後すぎても言葉なく曇つてゐる
そして昨日のやうに鬱々とした雨さへ降らう
としてゐる

雲は北方へながれ
きれぎれに白い雲もとんでゆくのだ
その空でちちと短く鳥がなき

眞蒼な椎の厚葉が眉のうへに迫つて
それらを見上ぐる
私のまなこは獸類のやうに怒つてゐる
机に向うて手をなぜながら
肉體をつらぬく焰に燃えてゐる
石に消えて風がさつた
あまりにも平靜に日が暮れていつた
ああ それにしてもまだ身を療いて抗はうと
するものがある

しあはせを祈るひとへ

櫻村彬夫

遠くに山が 山の背から鬨雲が湧きおこり

いまはもう 陽はたかく 私の心から
昨日の翳は 消え散つて歸つてしまつたのに
背のびをすれば 私の夢はとほくかすむ山の
背を越えてゆくやうだ
いまは困るほど輝かしい景色を藏めきれない
で
私の心は奇妙につかれて 眠りこけてしまふ
やうだ

閉された庭

最上八平

青空と憂愁に盈ちた高臺の街よ！ 蔦に覆は
れた石墻の圍める静寂の庭よ！ 陽は明るい

(なにももの郷愁でもない……)
それを眺めるのは今日の私の心だ
たちまち晴れわたつてゆく私の心のなかで貴
女はまぶしく 麥稈帽子を被り直してたち去
る……
めざめた心のなかでひとつの影が明瞭に傳言
のやうに長く落ちてゆれてゐる

ちひさな路は 夢のなかへ折れまがつて消え
夢は木立のかけで 湖のやうにきらきら光り

(ひとりには獨りにとり残されて) 岸への小屋

は
風に吹かれて つかれたやうに像を變へた
私の夢はなぜそのさきに行かないのだらう

陰翳を見せながら、赤く錆びついた鐵格子の
門や、淡黄赭のパンガロウの上を翔けて行
く。
手入のない薔薇や牝中兒や金雀兒の花叢の中
に、壊れたベンチが捨てられてあり、そして
黴んだ露臺に淡紅色のシユミイズを干したひ
とは、もう美しい指でピアノの鍵もたたかな
う。

来る日も、来る日も、軋む裏門の扉を押し開
けて、ぶらんこの側で私は待つてゐた。私の
知らないアリサを、ベアトリツチエを、そし
て又、その小さな家族達を、彼等の幸福を祈
りながら。

それなのに何處に去つたことだらう？
あの夏の夜の焚燎の團欒や、私の想ひ出は—

私は知つてゐる、だが私は知らせることが出来ないのだ。

秋色

宙 鑛之介

雲はいつとき
山の頂きにからんで
ちぎれちぎれに切れて黍の穂に揺れた

機関車は山の中腹へ白い煙をとばし
やがて峠を越えるあたりで
かすかな汽笛を呼んだ

影のない傾斜の耕地で
百姓はひとり風に尻を吹かれてゐる
疎らな林の背中の
ひとひらの雲を浮べた沼尻で
午後の芒が光つてゐる

ひっそりと鶏頭の燃える背戸に
このごろ
風のそよぎもあかるかつた

まひるの小曲

水町 源二

かよわい少女の憂ひのやうなあひの合歡の花

も、ほのかな過去の夢を抱いて、くづれるや
うな眞夏のふところの中へ散つていつた。す
べてのものが白つぽい光の中でつきはぎだら
けのとほい想ひ出をひつぱり出さうとして喘
いでゐる。

あゝ そのあつい溜息よ、
眞夏の暑さを生むその溜息よ、
幼いころの匂ひのする青空が、あんなにもお
前を待ち憧れてゐるのに、失はれてしまつた
青葉の感傷はもう再び歸つて来てくれない。

……

ひとり縁側にゐて庭を眺めてゐれば、鶏ばか
りが何の屈托もなく、豆の葉をつついてゐ
る。

つゝゝゝつゝゝゝ

じつと耳を澄まして聴いてゐると、その音と
音との間にかくれてゐる、小さな静寂を渡つ
て、逝つてしまつた春が、年老いてしまつた
春が、プラタナスの冷たいやうな視線の中を
むかし、……花びらの落した涙の断片を探し
出さうとして、とぼとぼと杖ついて来るやう
な氣がしてならぬ

海の圖

林 洋太郎

いつからか

海もたのしさできらめきひかつてゐるし
ひかる海をこえて 遠く たんかうのどろつ
このとどろきがするの
つかのまぼくは海にむかつて危なくさそはれ
てゐる

ひきずられまい

活字とにこちんよりあぢけなかつた昨日のし
ねんだ

かたはらのつやつやとかうがうしいねこのか
んかくがかぎりなく哀ませ

ねこのめに流れてゆく雲々のすがたがあつた
りすれば

ぼくはたくましく感傷にしずんでゐた

今山脈の南端に

白く光つてむくむくでた入道雲の方向からは
ねつぷうさへふいてくる
陽炎のあたりきらめく海に向ひ
からだはまげしんけんにまなこをひらいてゐ
ながら

からだはゆらゆらとゆれてゐながら
ぼくはしんから素直になつてゐるしところは
たしかに安らかである。

初 秋

關 且美

味爽あじさわの恥らう空氣がつめたく澄んでうつとり

と遠くから

揺れてきては清らかに通りすぎる

ときには 哀しく神の指にまつはり

鳩のごとくさめざめと

その生理に濡れる歌、

そして わたしのうすい純粹な肋骨おほらほねにも重い

言葉をかけて

愁ひよ 昏く睡り

それはまことに素晴しい

しろい ゑまひの祈り

それをくりかへしては

なめらかにめぐる光りの午後へと

静かな出發

あゝ、美はしく崩雪れる歌よ

わたしとともに

すべての時代とともに

蒼く 悲しくその懼れをはこぶ。

秋・家族

出羽 浩

空いちめんにくくしろい雲が湧いて

稲の穂のうごきにも

はげしい秋のにほひがあつたが

つかのまにあたりのけしきはさむざむとした

ものを漂はせて

まもなく庭の葉鶏頭をぬらし

しほの背景のよりもはやくはげしく

みるからにたくましい自然のちからをかんじ

てみた。

雨は庭の木木にそぼ降つてゐる
座敷の縁に立つて凝つと

死んだこのやのあるじを偲ぶ……

美しくなつたひとりの妹の

静かに針をはこぶ

去つて行つた母さんのどこかに似て。

秋

大上敬義

涙を呑むと肺が濡れる
深い呼吸をするには扇が要る

静かなるものゝへだたりに吐息溜るは

この身

ひとつの輪廓の苦しさに

むしろ

僕は肋骨を吐いてしまひたい

×

日あたりはいい

目をつむつても明るい

蕾の中の花蓋のやうに

僕の瞳も明るい

しぜんに

目がしらが熱くなる

×

生きものと生きもの

親しく寄れば暖かい

きみよ

僕の血は汗よりも劇しく

装ひの下を走る

俳句篇

吹きかくる雨に鳴子の鳴りにけり

ごろ／＼と子供角力や草紅葉

蜜柑熟れて従妹笑みつゝ來りけり

焚火どつと草にうつりて呼ぶ子等よ

稻架につく山田鴉のあくどさよ

木兎や犬の子乗せし牛車

椎の實をところがす夜の疊かな

年の夜を灯せる露次の詞かな

北風の提灯つけて渡しけり

青蜜柑しぼりて皿の秋刀魚かな

佐藤 宏 (東京)

宮内 夜潮 (山口)

關根 哥名慧 (埼玉)

平尾 つねいち (八王子)

伊藤 叢石 (大連)

大久保 つねみ (大阪)

杉井 露城 (羽生)

石崎 政一郎 (東京)

杉江 謙 (東京)

小林 朝路 (伊豫)

如月や烏の嘴の樹に光る

いつかついて來し犬と初日拜みけり

スリツパに雪解の日のあたゝかし

つとはらの鮭ふられ行く雪野かな

桐の實に風の日輪寂びにけり

山脈の雪見えながらお降りす

春の土が見えたるテニスコートかな

連翹の咲ける籬の朝日かな

沈みたる蝌蚪に淨土の日射かな

蛙田に灯る電車となりにけり

田村洛月(千葉)

松倉若葉(東京)

中西保(大阪)

植野華子(富山)

水澤鳴世子(群馬)

陌間武雄(神奈川)

千葉棟郎(奉天)

中村白楊(埼玉)

三上秋翠(東京)

桐生京鶯(横濱)

牧丹に通りますがれる遍路かな

蟲賣を照らし自動車曲りけり

海棠の宿に早吊る蚊帳かな

舟の男瓜喰ひすてゝ綱解けり

若葉の中を魚の如くに遊びけり

麻刈女新島守を立ちてみる

かつこうのきこえずなりて朝の霧

花松や池の中なる五輪塔

初茄子を買ひためらへる妻哀し

揚る手のみな月にあり盆踊

申上健三郎(和歌山)

中澤ふさ子(東京)

河合眞砂(廣島)

田中清二(福岡)

尾崎木星(東京)

同人

京純美(朝鮮)

山崎誠三(石見)

瀬木潜(東京)

山田三三男(埼玉)

風にほどけし黍の葉月へ流れけり

青柚を拾ひためたる土用かな

縁日に植木買ふ子や初裕

鶯鳴いて渡れる青き菅野かな

夜の雨葡萄食べけり蚊帳の中

よく晴れし雲出て居たり稻の花

燈籠に苔浸み入るや秋の雨

木の葉髪蕭條として母を思ふ

心もちやつれし頬やはるのかぜ

夜學子の出切りし門を閉しにけり

奥田雀草(淡路)

木村雅樂子(福島)

井上けい子(浅草)

中村白楊(埼玉)

大石君影草(山口)

西尾正夫(朝鮮)

眞野堇子(東京)

浅川みつる(奈良)

有城月子(和歌山)

大楠雅城(久留米)

しろくくと象牙のほねや秋扇

はりかへし障子にうつる寒さかな

大風の吹いてゐるなる枯木かな

枯枝のしづもる霜の深さかな

春惜しみあひつる競技終りける

石路の雨さむき障子を閉しにけり

庵かこむ木々に山茶花ありにけり

枯道の遠き果より暮れ来る

いたづらに机上灯にして雪夜なる

ストーブの燃ゆるを待ちてゐたりけり

中村白楊(埼玉)

高津昇(和歌山)

百井九一郎(和歌山)

丸山眞雄(東京)

同人

新井更二(東京)

石井月走(和歌山)

李亭哲(佐賀)

小林とし子(兵庫)

高橋貞雄(京都)

かぎりなくとびてうれしや石鹼玉
立春の風の机上をみださざる
枯蓮の綴れる如く伏しにけり
はじめての奈良に来て春惜みけり
暖かに石蹴りはやりそめしかな
春夕 いで来る熱をおそれけり
楓の芽ほぐるゝ墓に参りけり
花の屑池をながれていづるかな
春の夜や客の去りたるあとの膳
月見草子を抱くすべを覚えけり

白井九一郎 (和歌山)
住田元信 (神戸)
秀門人 (佐賀)
高柳腰篋 (紀伊)
廣奥牧子 (北海道)
山田光男 (東京)
原節子 (東京)
中村白楊 (埼玉)
空木劉三 (大阪)
山野金太郎 (岡山)

春の日のどこまでも波光りけり
手を觸れし巖のつめたき河鹿かな
朝もやの雨となりたる田植かな
セルを着て臙脂の帯の目立ちけり
はつ秋の風のまつはる裳かな
登山子の行きかふ町となりにけり
溺れし兒磧に上げつ草いきれ
短夜やみえて來りし湖の面
うなだれてゐるは泣きゐる團扇哉
短夜や鼠のはこぶ明日の糧

水野松人 (東京)
申上健三郎 (紀伊)
平谷のり (福島)
渡邊山査子 (埼玉)
奥田釣子 (東京)
藤崎紫容 (東京)
尾崎弘孝 (直方)
中村白楊 (横濱)
鶴田木々子 (佐賀)
田中蘇兄 (東京)

縫ひあきて出づれば菊の匂かな
朝寒の潮汲み上げてゐたりけり
てのひらのながめうれしき葡萄かな
押れつゝ花火の池に出でにけり
穂の子の一人となりし獨り言
おのづから消ゆる焚火を離れけり
淋しきことを聞きつゝ寄りし火鉢かな
草枯の見ゆる日向となりけり
雪空や聲なき山の木々淋し
秋日和姉の子二人來りけり

荒木信子(宮崎)
山本江蓼子(兵庫)
西町文江(北海道)
渡延山査子(埼玉)
高場高唱(長崎)
村山眞智子(愛媛)
藤竹歌都美(廣島)
金衣公子(横濱)
佐藤庄治(福島)
穂積元三(愛知)

背かれし文焼いてゐる火鉢哉
風の音聞きつゝ宵の火鉢哉
風凍る夜半に目覺めてゐたりけり
悉く春めく物の光り哉
草を摘む子等にアトリエ覗かるゝ
早春の雨の音きく寢覺哉
冬田道利根の堤に出たりけり
ストーブをかこむ一人に電話かな
玉子酒に母を酔はしてしまひけり
古りけるも涼しきまみの雛哉

銀翼(函館)
山下松仙(香川)
山下眞次(千葉)
町谷紅葉子(函館)
村田敏之助(埼玉)
福田勇(京都)
林武壽(千葉)
大房好一(神奈川)
鬼木石城(佐賀)
坂木白鷺城(大阪)

鳩遠し水の光にまぎれつゝ

下萌の線路歩ける工夫かな

暖き障子によせしミシンかな

雪消道餅つぶれて落ちてゐし

玉島も貝寄浦も花曇

馬賣りの馬牽き見せる若葉哉

晝顔や石を重ねて牆となす

傷つきし蜂這ひ上る庇かな

大瀧の音に吞まれて立てりけり

宵月の映り來し田を植ゑにけり

横田正雄 (大阪)

内田武夫 (東京)

濱口邦子 (長崎)

古家弘茂 (北海道)

丹瓊心聲 (土州)

大塚喜十 (群馬)

大前恵兵衛 (大連)

庄子紫陽子 (宮城)

柴田美代人 (長崎)

中川武之 (福岡)

藤の根のひろがる庭や蟻地獄

喜雨休み潮風呂たてて浸りけり

音もなく満つる夜汐や銀河澄む

庭の木に蟬鳴いて日の陰りけり

末枯や明障子の月あかり

秋の山見てゐる中に陰りけり

眞夜中の喜雨に起き出し主哉

地藏會やつぎと上る小蠟燭

ひろくと空の碧さや秋の風

はたくとを飛ばして畦を行きにけり

加藤通草 (東京)

橋本吐詩夫 (岐阜)

町谷紅葉子 (函館)

高玉康 (東京)

磐川螢水 (東京)

宮島紫朝 (兵庫)

森田千賀馬 (東京)

新田吐夢 (香川)

關谷弘一 (朝鮮)

守時高 (岡山)

重なりて霧の中なり那須の山
夕陽にバツタ飛ぶなり草紅葉
千木の雪杉の木の間を拜しけり
走馬燈消えて心中事切れぬ
菊畑の障子明るく時雨れけり
枯芝に煙草火を踏みにじりけり
初日出金波に船路進みけり
水噴かぬ鶴の翼の垂氷かな
水鳥に枯芦を透く月夜かな
端近や暮れなんととして雪明り

山本鳩子(宇都宮)
工藤常雄(岡山)
田端冬二(三重)
田淵正子(大阪)
高玉康(東京)
田口四郎(千葉)
記村叡山(神戸)
小野澤鐵彌(東京)
小林麻沙緒(川崎)
以後崎冬村(茨城)

一心に初日おろがむ盲かな
時雨るゝや芝生の中の石の敷
春の灯の温泉の町に着きにけり
月の沼雪の林に圍まれぬ
酒酌みて落花の中に遊びけり
枯木立鐘樓の鐘の碧かな
春雨にいつとはしらず濡るる貝
貨車一輛住きつ戻りつ日永かな
夕月や金屏の雁飛ばんとす
雨しとゞベンチを流る落花かな

赤沼芳三(函館)
澤木春外(千葉)
岩井完司(東京)
濱文路(青森)
望月泰一(静岡)
篠井緑星(山口)
辻豊(和歌山)
笠原萬治(長野)
佐藤良波(新潟)
尾式静志(和歌山)

火を吐ける山に月ある時鳥

老松の立枯哭す蟬時雨

路次を出て祭の群に入りけり

さつと來し曉雨に蓮吹きぬ

纜の張りきつて蜻蛉たちにけり

雲、雲を追ふて夕づく芒かな

二つ沼見下ろし愁ふ芒かな

火の山の火に仄めいて霧動く

月の波重なり合ふて寄せにけり

帆柱に懸けし行燈や地藏盆

荻原水郷子 (山口)

山田白羊 (宮城)

渡邊千代子 (盛岡)

藤原キク子 (大阪)

守時 高 (岡山)

鈴木晶司 (名古屋)

太田あさし (岡山)

住谷光泉 (京都)

直本春霞 (愛媛)

吉田 清 (彦根)

菊もすがれて指先の白く冷たき程

大木の美しさは秋の煙の立ちてゐる

夕焼うするる稻の車と行きずり

嶺々の雪日にまかがよふ國の秀を越ゆ

塀の尋ね人がぼろぼろな、此頃の寒さいふている

閑かさは曇る日の梢なる柿

春夕風の川沿を唄ひくる子に

山巖、早春の煙朝へたててゐる

木の影、雪がまだらで歩いてゆく

雪の來さうな太陽の顔と廣告氣球のあるだけ

島 美子 (奈良)

中野篤朗 (福島)

江之澤 庄太郎 (横濱)

立春 大吉 (埼玉)

川路 港 (大阪)

山田良一 (鹿児島)

佐藤直藏 (秋田)

守屋 節 (東京)

伏島 啾平 (宮城)

萩原杏雨 (不詳)

子供こどもおぶつて春の空おほきなそら

柱時計の音の壁も病院である

山にも春がきた桑畑の中のひと

梨が袋着て浪音へつらなる空が一枚

にぎやかに水が流れる櫻の蕾

木の芽よう晴れてめいめいの仕事に行く

花もつた風の、風車賣りに来る

ガスタンクもいちにちの雨の窓を閉める

雀みんなで止りに来た聲

椎の花匂うて犬が犬嗅いでゆく

夏木郁三(秋田)

石森静太(大阪)

長塚映栗子(茨城)

鈴木小寒郎(東京)

森 信(福岡)

高橋ふさを(青森)

岡野春草(三重)

川路 港(大阪)

伊藤順子(秋田)

守屋 節(東京)

レールがすうつと通つてゐて桃咲く

月夜がひろいところで旅の汽車

ぐみの葉うらの白い蝶々が水の面

山の色も夕風が出てくるお膳のもの

蟲なくほどの庭はあつて母と居る母の團扇

旅の暑さ汗ばんで大佛の顔

桐の花こぼるる牛乳しぼつてゐる。

月夜の砂が冷えてゐる浪音

泉の湧いてゐる流れてゐる合歡の木

草枯れて子どもの知つてゐる道

谷口 敬(三重)

氣久智醉(宮城)

井上麻黄子(京都)

田村スエ子(山口)

佐藤青美(東京)

親井牽牛花(三重)

森 信(福岡)

青木樂秋(宮城)

廣瀬薩江(愛知)

村上政一(愛媛)

着いて水音のすずしい岩のでこぼこ

豆の花暮れきらない山の線がある

月の出ごろの白い花の亭に行く道

ポストに入れて来たことが月夜を歩かせてゐるのです

死ぬまで働いた手をくませる

粉な雪、焼跡から拾ふ物も

日の落ちたばかりの月の高さが噴水塔

葉のふるのは監獄の塀で、私の体温計

しづかに犬の子たわむれて月のあかり

めしべをしべ雨が晴れてゐる

羽根淵 僊一郎 (豊橋)

谷口 敬 (三重)

佐藤英子 (熊本)

谷塚灰人 (岩手)

青木樂秋 (宮城)

川路 港 (大阪)

倉知鈴彦 (名古屋)

河本 勇 (東京)

石井 實 (福岡)

大西清雄 (長崎)

さくらんぼの赤い道が遠く行く空

汽笛が鳴れば晝で工場の裏の雑草

ただ何となく芽ぶきさうな明るさになつて空

松に冬の陽が幼稚園のこどもたちで

面會の女工さん、雀二三羽を庇に

錆びた軌條がのびてゐるだけで冬の水平

冬にはぬくい夜とてこまごま仕事がある母のまはり

追はれどうしのくらしの麥の芽

高壓線の晴れやうは春が来てゐる雲

櫻咲いた日曜の歩哨さんです

西村まさを (佐世保)

村上政一 (松山)

小山仙吉 (愛知)

同人

長谷辰雄 (石川)

江口一夫 (佐賀)

同人

同人

川崎 清 (東京)

小川北斗星 (千葉)

さくら咲いて月夜の屋根のむきむき

ほんの霽れ間の梅落してゐる聲

白い雲も噴水が落ちてみどり葉

窓の一つ一つに空はあつてみんな仕事

がくがくする床屋の椅子に夏の海暮れてゐる

蠶都合も好い時のおとむらひして夕日が向日葵の花

晝どきの燈臺ならほつかり晝月のある方角

池のべのペンペン草もガラス工場の火がひるどき

ゆく蝶 くる蝶の水がながれてゐる夏

松に日がさしてからの漁村と海岸線

小山仙吉 (愛知)

近藤桂兒 (大阪)

古市信夫 (横濱)

松羅幸生 (京都)

同人

西峯經美 (大連)

三田茂夫 (東京)

同人

大角文彦 (名古屋)

小山仙吉 (豊橋)

梅雨明の夕日となつてさせば電信棒のてつぺん

夕顔が咲いてゐる夕暮なら二つの椅子

墓地には十字架の墓も山鳩の聲

満潮の月夜の潜水服つけてゐるのです

月の出の一本道が通つてゐる工場地帯

朝の虹かかり先生と生徒とゆく

生きてをれば、もう子供は學校で柿の木の柿

噴水に鶴が一羽ゐてひとりできてゐる

たばこにしてゐる大工さんのうしろが海で岬で

草の穂にうす／＼かゝる銀河かな

羽根淵 僊一郎 (豊橋)

加藤文雄 (岐阜)

道野 久 (岩手)

鈴木政雄 (大阪)

加賀谷 北遊子 (岩手)

吾郷東波 (東京)

中村夜詩人 (熊本)

十河邦彦 (東京)

西峯經夫 (大連)

園部勇治 (岐阜)

高く上りし氣球動かす街の秋

音ぞゆく夜間飛行や星月夜

落葉踏むかそけき音の近づきぬ

汽車を待つ小さき驛に時雨れけり

新刊書買ひて戻れる夜長かな

電信機音のさやかに事務始

家のものみなつゝがなし落葉掃く

遮斷機は雪ふり落し揚りけり

冬晴やかもめを放つ防波堤

桑畑に鳴く雉子のあり梅咲ける

園部 勇治 (岐阜)

木下 正男 (横濱)

龜田 キヨ (新京)

杉井 雪洞 (三重)

上山 薫花 (東京)

櫻木 麻沙子 (滋賀)

關谷 弘一 (朝鮮)

水元 流星 (東京)

春木 青鸞 (三重)

小沼 一舟 (千葉)

渡り鳥ゆくとき星の見えそめぬ

枯眞菰ひそかに波をかへしをり

みちのくの童に良の冬來たり

連翹に窓あけてある朝寝かな

早蕨を手にくゝ山の子はかなし

垂り藤のむらさき窓に近く病む

鶯が來鳴くよ今朝も髪梳けば

柳籠おどろきやすく群れゆきぬ

烏賊干せる磯はたんぼぼかゞやかに

花蜜柑朝の潮路のすがくし

土屋 喬四郎 (埼玉)

松川 奎太郎 (埼玉)

鈴木 欣々子 (福島)

上原 宵風 (東京)

五島 昭夫 (大阪)

樋村 美子緒 (東京)

松居 多津子 (兵庫)

中村 秋晴子 (神奈川)

宮寺 芝生 (東京)

三田 玖美子 (八王子)

風鈴のなりつぎてよき夜の雨
蓮咲いて野の曙のしづかなる
丹のあせし宮に馬酔木の春來り
青簾捲く手に月のさしそめぬ
向日葵をたゞきつ海へ驟雨去る
麥秋やたゞかぎりなく目が黄なり
青嵐瀧ひとすぢの光りつゝ
夜の歸省我がゆく方に稻妻す
凭れゐる橋の下より蓮見舟
蚊遣火の蓮田の月にひろがれり

柴田翠光子(愛知)
田上恂吉(埼玉)
土屋蕎四郎(埼玉)
志摩六良(東京)
岩田金吾(愛知)
植竹まさし(東京)
城しのぶ(愛媛)
小林仁郎(東京)
田村露香(東京)
小山梔子(東京)

黍の風はげしく秋の立ちにけり
すゞかけを鳴らす夜風も秋めきぬ
初雁やカンテラつけし渡し守
月照りて温泉煙の中に紅葉あり
赤蜻蛉船にしたがひながれゐる
檜炭のかなしき朝をはじきける
檣宿のランプの下に雪はたく
夜濯の湯殿よりみる星月夜
紫蘇の香はつゝましきもの畑小春
蓮洗ふてもとに眞帆の波來たり

威徳志朗(東京)
中村秋晴子(東京)
林連城(函館)
栗田閑窓(栃木)
渡邊翠子(福島)
木引静子(京都)
植原禮市(千葉)
碧空ムム(熊本)
緒形愛亮(東京)
木山寛平(東京)

窓あけよ水柱とるべき雪の晴れ

母の指輝破れにして乳を煮る

つれづれのをみなに桔梗つゆけかり

小夜時雨母の肩掛けぬれにけり

一羽二羽こぼれ糺に雪を下りる

しもやけにをんなを知つてひとりゐる

まなびやの庭よりつゞく枯野かな

假名文字の手紙もそふて草の餅

子を抱けばミルク匂ひぬ春の宵

山吹の眩しき茶屋に休みけり

葉若涙甘子 (八王子)

帆原文太郎 (長野)

中村眞一 (東京)

近江冷一郎 (東京)

鮎生 旻 (大阪)

加藤覺範 (埼玉)

春山 光 (栃木)

金井 香 (和歌山)

金井ノ績 (和歌山)

いさかひのあとさびしやな春ぐもり

春の日に焼けし子供ら夕餉食す

傘干して雲の遠さよ沈丁花

若草や夕づく山のゆたかなる

蝶々のもつれんとして別れけり

アネモネをみてしばしまた妻を見る

少年のうぶ毛いとしや蝶のひげ

石炭の流るる溝や花菖蒲

梅干すと濱一ばいに筵しく

麥秋の村は火の見の古りにける

鈴木曉村 (東京)

大江しのぶ (愛媛)

稲葉敏彦 (東京)

植原禮市 (千葉)

金井 香 (和歌山)

木山寛平 (東京)

清水三郎 (東京)

石飛如翠 (島根)

島 夢二 (和歌山)

茨木美佐子 (横濱)

よきひとの袂に消ゆる螢かな
灯の海なる青簾捲きにけり
若芝の川門毎にせきて住む
蝙蝠の晝をむろせる廟のあり
日向葵の花芯に黒き蝶疲る
黄蝶のもつれて光る花薄
炎天の屋根の上行く帆桁かな
桑の實に唇そめて童三人ほど
少年の指美しき火鉢かな
朝寒や竈の母に話し寄る

林 修平 (東京)
志摩百合子 (東京)
鈴木作男 (福島)
今岡 雄 (臺灣)
神田耶蘇基 (東京)
山根星湖 (大阪)
三吉 アキラ (土佐)
神田耶蘇基 (東京)
鈴木純男 (釜石)
原田 章 (兵庫)

稻舟や人が動けば穂が浸る
鴨渉る聲のふかけれ澤時雨
霜とくる葱畑にゐて人親し
落栗の毬に月光するどしや
霧はれて海あらたなる富士を置く
時間表みてまたもどる暖爐かな
柑蜜山入江いだきてしづかなり
たそがれの空うつくしき枯木かな
着ぶくれし小學校の教師かな
波よけの堤の鼻の焚火かな

西峰常範 (高知)
植原禮市 (千葉)
青柳峰吉 (東京)
石倉白花 (東京)
鈴木作男 (福島)
河田芳樹 (釜石)
島 夢二 (和歌山)
原田 章 (兵庫)
青木金鈴子 (兵庫)
田上直美子 (大阪)

夕焼のさめゆく落葉掻きいそぐ
花冷えのしるき障子をとざしけり
夕靄の流れくる炭切りにけり
商人にたまの休日やすみ下萌しもゆゆる
猫柳光りそめしとたよりかな
春風や何か知らねど遠き音
春愁のおくれげに指病む如し
笹なきや池へながるゝ水の邊に
ちりいそぐ花の下なる遊戯の輪
また汽車のとゞろと去りぬ夏淺し

谷上草民子（大阪）
淺沼みどり（釜石）
中野みさほ（旭川）
原田魚梯（兵庫）
原田章（兵庫）
江川ひろみ（大阪）
神谷一雄（東京）
早瀬一一（名古屋）
宇野樹夫（京都）
田中葉炎（埼玉）

拭きかけてあるガラス戸や春の雷
ものおもふくせのつきたる端居かな
これほどに野は青からず草の餅
桐の花落ちくる溝の泥をあぐ
乙女の日はろかとなりぬ單帶
畠また戻りて來り芥子の花
盆提灯稻田の風のかよひけり
朝顔の風に投網をつくろへる
蒼き海夾竹桃の上へ展く
水霜に垂れて大きな葉なりけり

富崎逢子（東京）
なぐさ・朱實（大阪）
高山 繁（岐阜）
戸倉やすし（岡山）
岩田政雄（横濱）
長谷川芹村（京都）
竹内春水（横濱）
佐藤節三（岐阜）
加島放浪（廣島）
富山あき子（滋賀）

歌
謠
篇

汲みあげし水に草の實うかびけり

壁にきてかまきり翳となる夜かな

朝顔をぬらす雨ふる震災忌

病院へ届ける秋の袷かな

玫瑰ばななに大波よせしあとのあり

庭さきに鹿の來てゐる障子貼る

岩崎 武 (兵庫)

水の江 準 (長野)

久保田 曉藏 (東京)

掘切 まさ (千葉)

高峰 英一 (東京)

加島 一雄 (廣島)

つくしんぼ節

筑紫春太郎

山は山霽れ
野は野で晴れた
ちよいと顔でも
アレ はづかしい

あたしアあなたに
心からつくす
ひとり野立ちの
ホレ つくしんぼ

ひとの見ぬまに
文でも書いて
ちよいと伸びしよが
ヤレ どつこいしよ

四角四面じゃ
話もできぬ
そこな袴も
ソレ はづしやんせ

港の女

大塚喜代子

細い煙草の烟りの淡さ

何處へ行くやら西東
ルージユのついた吸殻は
靴で踏れて泣いてゐるのよ

木曾の戀唄

原田文夫

今宵窓邊に港の夜空

なさけ薄霧星あかり

吐いた烟りのたよりなさ

氣笛の音に消えてゆくのよ

ハイ 燃える想ひか

木曾路にかほるヨ

おぼこ育ちの

鹿の子帯

鹿の子帯

バラは赤いよドレスの裾に
散つてはぐれた一ひらよ
煙草切なや幻は

海の彼方へ逃げて行くのよ

ハイ 昔戀しや

お六の櫛はヨ

泣いて眺めた

三日月か

三日月か

蒼い酒場

伊藤桂一

ハイ 誰の涙で

お山はくもるヨ

忘れられよか

檜笠

檜笠

ハイ 下る木曾川

別れの舟にヨ

想ひ出せとて

川風が吹く

川風が吹く

雨の降る日の 酒場の隅で
ひとり留守して 煙草をのめば
とろるとろると 遠くの空で
梅雨の暗さに 鳴るかみなりよ

派手なドレスに 襟垢しみて
二十幾つの をんなの徽が
苦い煙草の けむりに噎せて
胸に佗しく しみ込むやうな

せめて酒でも 飲みたいものを
疲れ疲れりや ころも滅入る
夢かうつゝか らすぼんやりと
蒼く褪せてる 花瓶の花よ。

戀だより

瑞丘千砂子

ゆく雲に
ちぎれちぎれの想ひをのせて
そつと託してやり候

幾千里

浪路はるかなへだたりゆゑに

ひたすら案じ申し候

待ちわびて

そのうち死ぬやもはかられませす

自信ごさなく居り候

えいいつそ

この身なくして影ともなつて

そこまで行こかと思ひ候

茶の花

藤一夫

白い茶の花 散るときは

時雨に濡れて 散つたと
だあれもぬない 茶畑に
チャツチャめ 啼いてゐただとよ

白い眸もとで いらんでね

茶山茶の花 薄情け

濡れちやいややと 泣いたふり

雨は 氣ままに降るだもん

濡れた茶の花 散り心

ほろり落ちてた 茶のうなに

チャツチャ啼きなき 見てゐただ

姐さ ま白い茶の花か

(註 チャツチャは冬になり雪になる)

牧場おけさ

内田皓夫

ハア

青青と しげりしげつて

今年も 白く

咲いた 牧場のエエ馬ごやし

ハア

そよ風の 吹いて流れた

去年の 牧場

四つ葉つむ娘のエエうしろ影

ハア
さびしさよ お前都に
俺らは 一人
土の田舎でエエ草笛をふく

ハア
光る雲 思ひ出してか
都の 空で
遠い牧場のエエ草の香を

枯草刈り

藤 一夫

枯草刈り刈り おら笑ふた

狐性かよ はツはツはア
すねて愚痴めの 孤リツ屁
のよ、うんとこすんな 言はんとけ

枯草ぐらしが 飽いたのえ
鈍な鎌みちや ひりりツと
意気地ないきに 孤リツ屁
のよ、めうに他人の氣 憎くなら

枯草刈るなら 早よ刈りな
いやな思案に へらへらと
冷やい音すべ 孤リツ屁
のよ、せんな投首 泣けてくら

(註 せんなはスルナの意)

夜の雪

北海 趙夫

終の
ほさきにふれし傷口の
小指に冬が光るはのう

盞の
影に傾むくこの闇を
浮世車が廻るはのう
ほのぼのと
月の匂ひか我が夢か

しんとろ粉雪が狂ふはのう

極道者の秋

木暮 晶夫

極道者でも子でござろ
山にのぼれば山まゆの
白さに顔が僂ばれる

極道者でも子でござろ
酒くむ窓の夕しぐれ
白髪の母が来るやうな
極道者でも子でござろ

風に詫びれば風さへも
アキよ戻れといふやうな

戀の長崎

南 夢 路

A

胸の十字架に心の涙 戀の長崎、黄昏ゆけば
可愛いあの娘もデウズの前に
啜り泣きつつ、ああ、啜り泣きつつアンゼラ
ス

B

唐人船かよ南京さんか 戀の長崎、出島の灯
掬んだ眞赤なギヤマンの酒に

なぜか悲しい、ああ、なぜか悲しい異國唄

C

赤い金巾貫ふた人も 戀の長崎、出船の朝は
思ひ出します南蠻船の
愛しお方の、ああ、愛しお方の青い瞳を

D

聖マリアも鐘の音便り 戀の長崎、月夜の丘
は

白のお墓のラテンの文字に
棕櫚の葉風が、ああ、棕櫚の葉風がそよと吹
く

E

お蝶夫人の涙に濡れた 戀の長崎、一夜の夢
に
帯もそらどけ朝霧千鳥

別れともない、ああ、別れともない海の色

ヌ プ リ

伊 東 雄 一

ヌプリ見たさに
ニセコへ来たが
ニセコ湯の里
ゆのけむり
にくやヌプリは
雲のかげ

ヌプリこひしや
父なし子には

晴れりや晴れたで

曇ればなほに

父ちちのよな氣が
してならぬ

夜半の寢ざめに

きこえる川の

せいてせかれて

流れておちる

あれはヌプリの

子守唄

——ヌプリはアイヌ語にて「お山」の意なり、
ニセコアンヌプリ及びニセコ温泉はスキーで有
名な地なり——

さみだれ

小山内 喬

さみだれは
優しいうたよ
ぎんいろの
絃のトレモロ

さみだれに
濡れてゆかうよ
なつかしい
あの日のやうに

さみだれの
路でないたよ
あのひとは
薔薇をかみかみ

秋の挽歌

藤 一夫

——ナア
ほんま 野ばらの芽のはりに
ふれてひととき 泣きまほか
小蛇小蛇よ のきなはれ

——ナア

さよか 眼のいろ秋のいろ

冴えて葉うらの あやしやの
さ霧さ霧に まよふ風

——ナア

しんど 野ばらに身のうつゝ
お死にやすなら 二日月
うすらうすらの 野火どすえ

別れ

川 端 亮 一

りんご畠の 葉のかげで
草笛吹いて 泣いたつけ

月の蒼さに つまされて
お前も共に 泣いたつけ

何んにも言はずに「さよーなら」
かんだりんごの 葉の苦さ

星の降る夜で あつたつけ
お前はお嫁に 行つたつけ

いその唄

藤 一夫

ひとめなく

心いちづに あかかつた
玫瑰は

日のくれ 波にすてられた ヤレ

かげ淡い

くらげのゆめか ひかる砂

十八の

想ひくされた 磯のすみ ホイ

岩かげに

洗ふ貝の身 白かつた

風しんと

海ほほづきの 齒にしみる ヨー

殻打ち

柴丘登志夫

胡麻の殻打つた

殻打つた打つた

殻は打てずに

指打つた

胡麻の殻打つた

殻打つて泣いた

胡麻の小粒が

眼を打つた

殻は打たれず

崎山みれば

鴨が鳴いてた

鋒杉で

胡麻の殻打つた

殻打つた打つた

生きるたけだと

殻打つた

割れて碎けた

片貝さ

暗い渚さ 夕残の茜雲さ

燃えた戀情も

散々さ

灰白い砂丘さ 二日の月さ

影もしらぐ

夜の沙風さ

一つびとつさ 崩れた挽歌さ

濡れた月光の

想ひ出さ

貝殻の唄

古沼歌二

さらさ小波さ 夕暮潮さ

さらさ小波さ 飛沫しづきの霧さ
夢も冷えびえ
片貝さ

柚の實

吳羽雪太郎

柚の實 柚の實
手玉に取つて
アラ
ぼん ぼこ ぼんよ
柚の實 柚の實
こゝは ぼくぼく

そとは あらうみ
氷雨の夜よ

柚の實 柚の實
手玉に取つて
ホラ

ぼん ぼこ ぼんよ

柚の實 柚の實
ぎゅつと にぎれば
白い しらい
吹雪のにほひ

角兵衛獅子

北川 弘二

寒い風吹く
ちり／＼雲よ
故郷はる／＼
角兵衛獅子
飢ゑて、凍えて
囃子で暮れて
父よ、母よと
空を見る。

越路行く道

教へてくりやれ
霧の峠の
地藏様

航空燈

みるくくるくと てらしゆく
春の夜穹を 航空燈
聳ゆるピルの高きより
蒼き大氣に映え行きて
赤黄青の三色に
溶けゆく月光麗はしき
みず・あきら

くるくるくると てらしゆく
春の夜穹を航空燈

口を噤みて君とともに
見あげし穹に杳かなる
廻れる彩の輝きに
抱きて永遠を誓ひたり

五月

川端 亮 一

去年紀州で
見たつばくらを
今年や伊勢路の

海で見る

泣いてきました
雨の夜月夜
想ひ出させて
花がちる

泣いてみたとして
かへらぬものを
海の月夜を
泣きました

故郷の濱邊で
忍んで泣いた
セルの着物が

なつかしい

春の新月

大河原 光

春の新月、うす眉の、
被衣、かづきし
花乙女。
匂ふ、かんばせ、草ごさへ、
青き仄らに、
燃ゆるぞえ。

春の新月、はづらひの、
とろみ、まどろむ、

花乙女。
夢か、匂ひか、さざ波の、
湖も底まで、
けふるぞえ。

水無月

川端 亮 一

想ひ出します
昔のひとを
ほたる飛ぶ夜は
しみじみと

青い月夜に

忍んで逢ふて
胸で泣いてた
あのひとを

ほたる来い来い
芒の丘で
ふれた小指が
忘らりよか

故郷は水無月
三年振に
ほたる飛ぶ夜に
泣きにきた

おきん堤

(佐保川傳説)

大上 敬義

戀の繪團扇

螢が落ちる

まんじ巴の
三ツ螢

落ちた螢は

おきんと佐助

ひとつ想ひか
袈裟斬りに

青い月夜を
眠れぬまゝに

來れば螢が
また落ちる

寝物語りの

おきんと佐助

つひの遺品の

この團扇

戀の繪團扇

螢が落ちる

落ちた螢よ
果報もの

孟蘭盆

伊豆美 邦

凌霄花の 花ゆれる

背戸の 狭庭の 貫ひ風呂

瀬音搬べる 宵風に

霧ひそやかに たゆたへば

涙ぐむよな 北斗の七星

夜の被衣の 彩濕める

淡き燈火や 青すだれ

蚊遣火にほふ 外縁に

眉庇 さぶしく 母と妹

謔かに 靈をまつるかな

あはれ 里の子 孟蘭盆を
嘆きつつ 吹くか 柴箱の
空に溶け入る トレモロが
何故か こよひは 身に泌みて
脆くも 泪 眼を霧りぬ

風 ほろ苦く冷 昏れぬ
笑めば こぼれる 鐵漿の齒に
母の老いしが 偲ばれて
しづかに 閉づる 暎裏を
よぎるは 亡父の 影かとも。

夕顔抄

早瀬 鮎 吉

青い簾を
透いてくる
夏の樹立の
涼風よ

髪のはつれの
ひとすぢが
硯に落ちる
風情にも

水莖のあとの
露けさの
なにかほのかな
氣勞れを

光源氏の
掌のやうに
ふいと揺れてる
夕顔よ

青りんご

花 火 雛

波にゆれます 銅羅の音が

はにかむリーベの 肌着が
ほつと汗ばむ 白日の陽に
白い汽船の パイプから
雲が湧きでる 水平線

パチンとあけた コンパクト
燃えた口紅の あの夢は
をつてたたんだ ハンカチフ
波まにかもめ ひらひらと
泣きたいばかり なつかしい

南風の青さに うなづいて
パンの匂が のこのこと
船の腹から 歩きだす
胸に鈴蘭 手籠には

青いりんごが 光つてる

想ひ出します 青りんご
薔薇にそまつた その掌から
くるりくるりと むかれゆく
楽しい憂愁のひとときを
そつと食べたい わたしです

アリラン悲歌

畝川 笙二

丘は桔梗の花ざかり
青いらす絹朝鮮娘たち
河をへだてた向ふまで
アリランアリラン流れゆけ

丘の眞下は大同江
白い帆の舟君の舟
高麗鴉が哭いて歸る頃
江下南浦は遠あかね

ボブラさやさや峠風
文藝峰に似た妓生
君の旅路を見送りに
畫舫で歌ふ愁心歌

牡丹臺から月が出た
ビーバル島も見ただろか
漬物瓶の影で君呼んで
そつとすねたら天の河

昭和十四年十月十日印刷
昭和十四年十月十五日發行

定價金一圓

不許
複製

編者
發行者
印刷者
印刷所

若草編輯部
大葉久治
早坂善太郎
大日本印刷株式會社板町工場
大實文館

東京市日本橋區
室町四丁目五番地
大阪市西區阿波堀通四丁目

東京市日本橋區
室町四丁目五番地
大阪市西區阿波堀通四丁目

株式會社
株式會社
大實文館
大實文館

東京市日本橋區
室町四丁目五番地
大阪市西區阿波堀通四丁目

株式會社
株式會社
大實文館
大實文館

新・若草詩歌集

若草編輯部・編
裝禎 鈴木信太郎

新・令女詩歌集

令女界編輯部・編
裝禎 落谷虹兒

・若人待望の年少詩歌人の作品萬華鏡——

令女界・若草兩誌に燦爛と咲き誇つた香氣高く芳郁たる純情詩歌の花束である。全篇悉くが、青春の夢多き若人の血潮に血ぬられた愛と美と苦と歡喜の結晶である。この詩歌集を讀まざれば、青春の日の大いなる損失と恥を得るものと知りたまへ。

定價 各一圓
送料 各十錢

寶文館發行

クローヴァーの便り

令女界編輯部・編
裝禎 久 久男

新・令女散文集

令女界編輯部・編
裝禎 加藤まささを

・清純な處女の情熱に成る生活記録——

令女界の花園に美しい未來の希望を育くんだ少女達——乙女の日の感傷は強くもまた麗はしい。それは夢の如く幻の如く、その日その日が美しい五彩の虹となつて流れてゆく。夢を愛し、幻を愛する諸嬢の手になるこれは華麗な虹の花束である。

定價 各一圓
送料 各十錢

寶文館發行

396
282

- ◆純情詩集・西條八十著・裝禎 加藤まさを
- ◆少女詩集・西條八十著・裝禎 加藤まさを
- ◆感傷詩集・西條八十著・裝禎 加藤まさを
- ◆愛の詩集・西條八十著・裝禎 加藤まさを

高雅にして匂ひ高さ西條八十氏の抒情詩集。春の日に、月見草咲く頃に、あるは落葉散りしく窓の邊に、雪の夜に銀鳩の嘆きのやうなこの詩集を、心からの悦びと感激をもつて誦されよ。

定價 各一圓五十錢
送料 各十錢

寶文館・發行

終

